令和4年度 県民グループ 企画支援事業 報告書

学童保育の現状と課題

～放課後の時間のジェンダーを考える～

NPO 法人
佐賀県放課後児童クラブ連絡会

調査方法

①学童保育支援員・補助員 約1200名のアンケート調査
②学童保育を中途退所した児童の保護者20名に聞き取り調査

調査実施期間

①2022年12月～2023年1月18日
②2022年11月27日～2023年1月22日

調査実績

①1270人への配布　回収799人（回収率　62.9%）
③保護者20名聞き取り

調査の概要

学童保育は学校よりもこどもが長い時間を過ごす場所である。働きながら子育てをする家族を支え遊びを通した生活の場として、一人一人のこどもや家族に与える影響は少なくない。私たちは2002年度に学童保育におけるジェンダー意識を調べている。20年後の今改めて調査することで、学童保育の中でジェンダー平等の生活づくりをめざしたい。合わせて、学童保育を中途退所した保護者に聞き取りを行うことで、佐賀県の学童保育の現状と課題を明らかにして改善に向けて考える機会をつくりたいと願って開始した本調査であった。

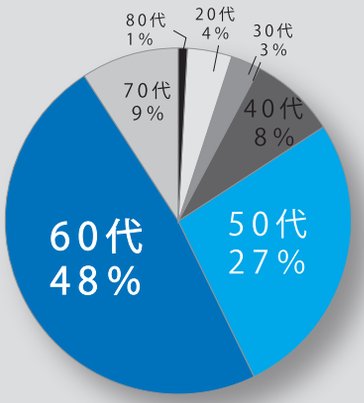
今回50代以上が85%、60代以上では57%（2002年5%）という年齢構成から高齢者が支える現場の課題も見えてきた。2015年に国は地域子ども・子育て支援事業の11番目の事業として放課後児童健全育成事業を位置づけ「小1の壁」「小4の壁」を打破するために取り組んできた。しかし利用児童の増加、慢性的な職員不足、放課後の遊びと生活を保障できない施設整備など、この事業の課題は深刻になってきている。
保護者聞き取りの中で新たに「小2の壁」という、こども自身が通いたくない場所となり、家で留守番せざるを得ない保護者の葛藤も見えてきた。
2022年の子ども基本法に基づき、この事業の現状から目をそらさず改善を図ることが急務だと言える。

≪提言1≫　世代バランスを考えた職員配置の必要性
≪提言2≫　高学年に対応した生活づくり
≪提言3≫　性教育、ジェンダーに関する研修の必要性

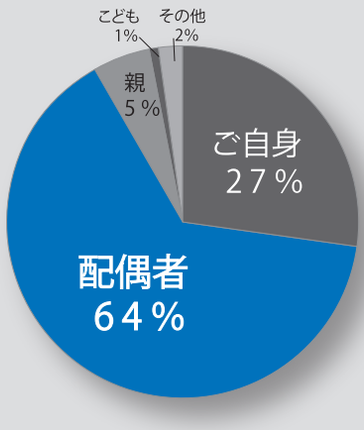
※2002年度に民間グループ調査研究支援事業「ジェンダーフリーの視点で21世紀を見据えた子育ての背景と展望を探る～学童保育編～」においてジェンダー意識調査

学童保育支援員・補助員アンケート調査【支援員の属性】

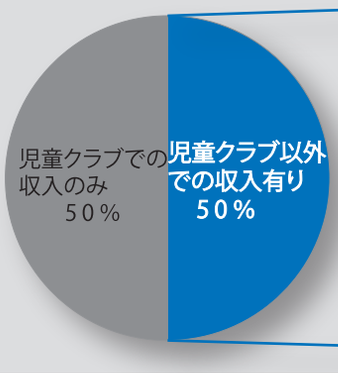
あなたの年齢を教えてください



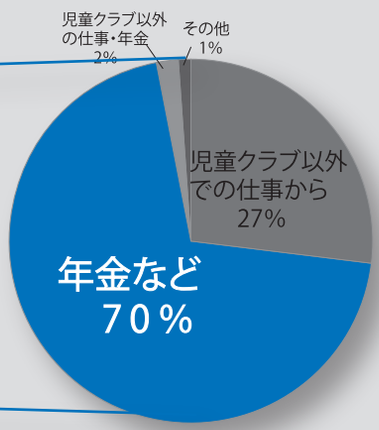
家計の主たる生計者はどなたです



児童クラブ以外での収入はありますか



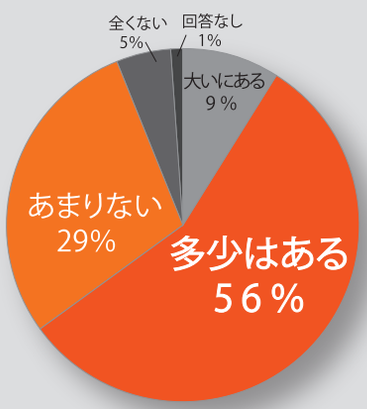
児童クラブ以外での収入有りの方は、どんな収入がありますか



年齢については、50代以上が全体の85%を占める結果となった。60代が一番多く48%、続いて50代が27%となっている。20年前の当法人の調査では50代以上は17,6%、20代から40代までが79.8%となっており、比較してみると、佐賀県で働く支援員（補助員）の高齢化がかなり進んでいることがわかる。また、配偶者の扶養に入っている割合が高く、主たる生計者が配偶者の割合は64%、児童クラブ以外での収入があると答えた割合が50%、そのうちの70%は年金受給者であった。このことからも高齢化が進んでいることがわかる。

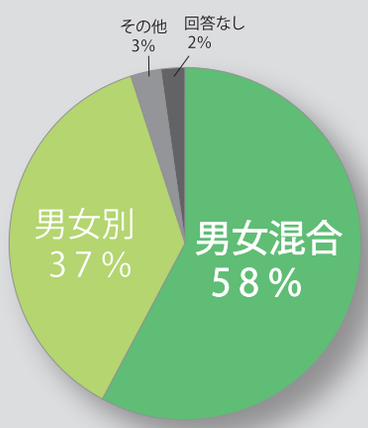
【個人の意識】

ふだんの生活をする上で「男」「女」の違いを意識することはありますか

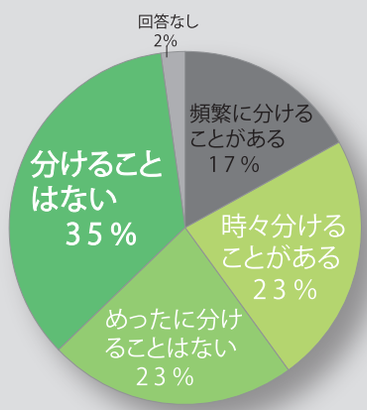


【児童クラブでの様子】

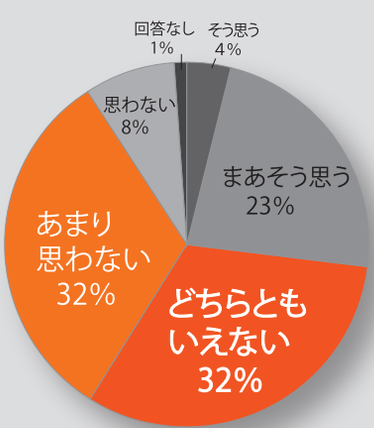
名簿はどのように作られています



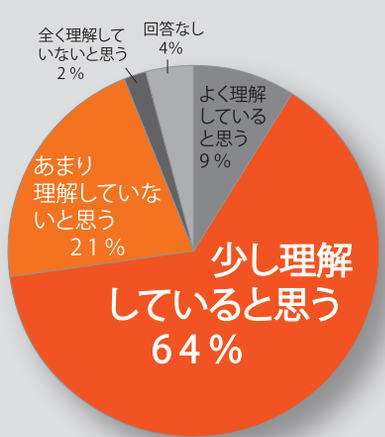
整列をするときに男女を分けることがありますか



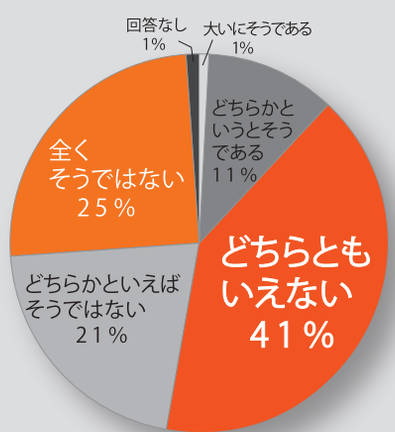
ふだんの生活をする上で「男らしく」「女らしく」ありたいと思っていますか

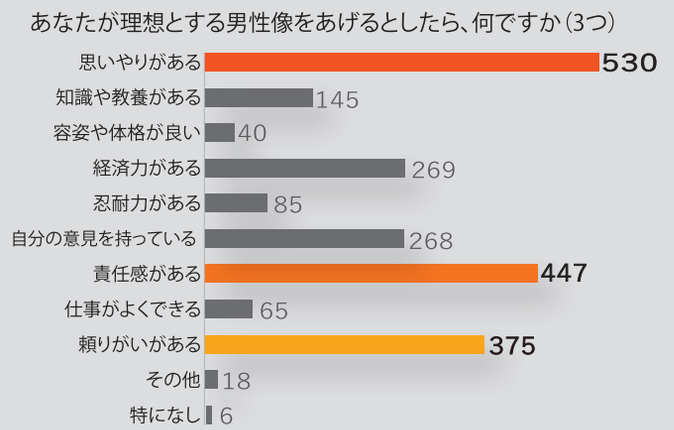


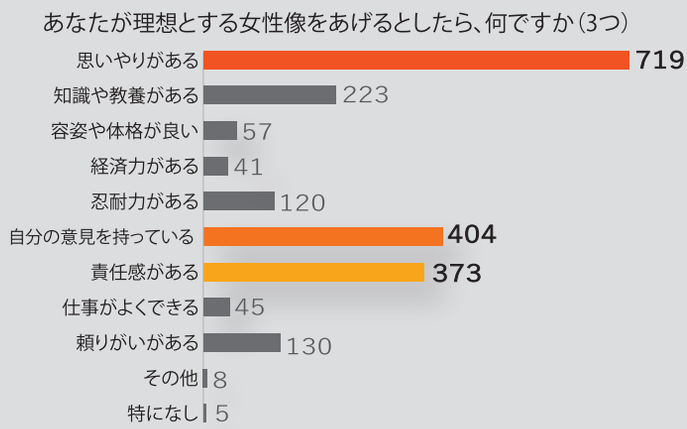
「ジェンダーの平等」を理解していますか



あなたは「男性が仕事」「女性が家庭」という考え方をどう思いますか

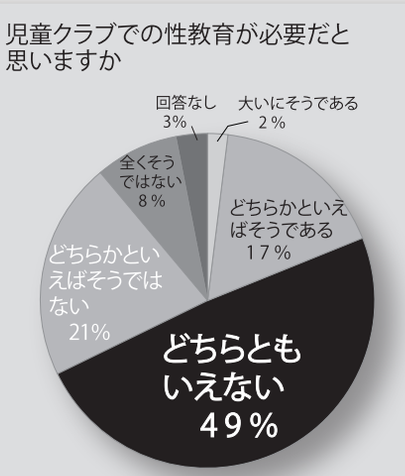


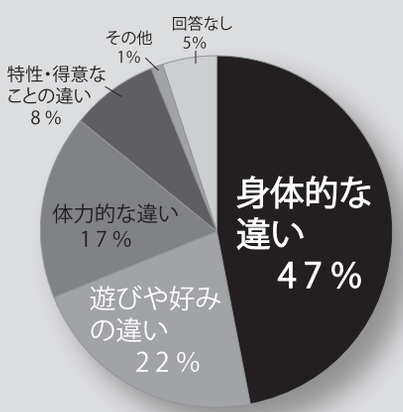


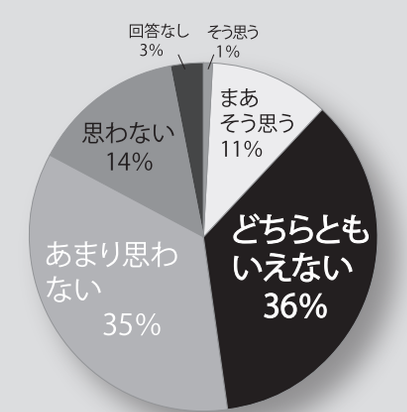


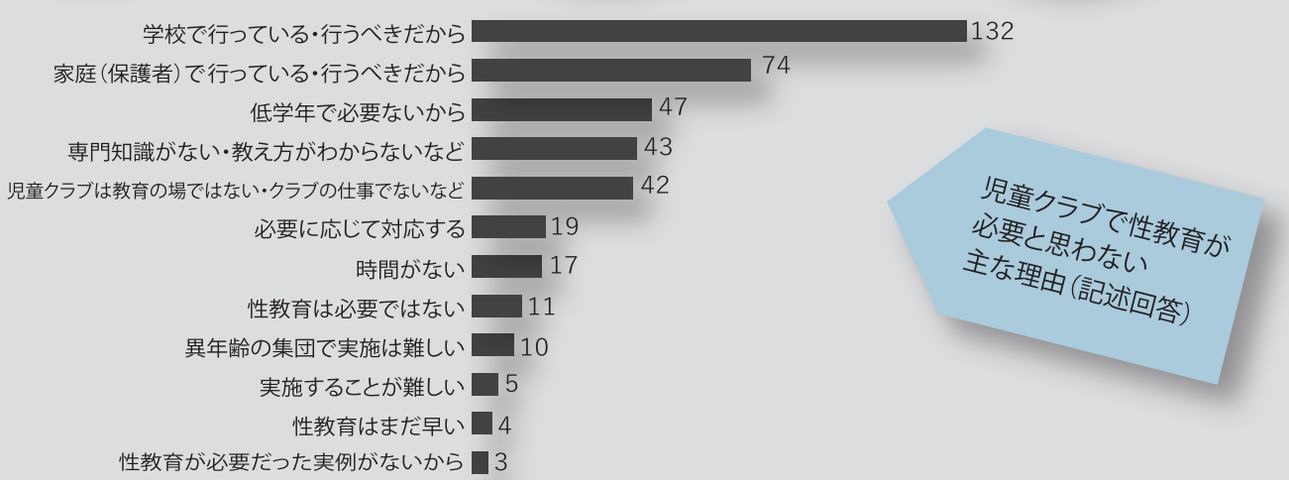
「男らしく、女らしく」ありたいかという問いに対しては、「「そう思う」という回答の中には「そのように言い聞かせられて育ってきたから」「自分らしくの中に「男らしさ」を求められている」「普段の生活の中でそれを求められる場面が残っているから」という回答があった。
「思わない」という回答に中には、「時代が変わったから」「男女は平等である」「このような古い考えは差別を伴うから」「一人ひとりを尊重して、その人らしくで良いと思う」といった意見があった。
ジェンダー平等については、「少し理解している」と回答した人が64％だった。理解をしていると回答している人の中にも、「こどもにとって母親が家庭にいる方が安心できるのでは」「女性には子育てがあるので仕事より家庭のほうがいい」「男性の方が社会で活躍できる」「女性の方が家事育児が得意な人が多いから」といった意見があり、ジェンダー平等に関してはさらなる理解が必要なことがわかる。

【こどもへの関わり方】





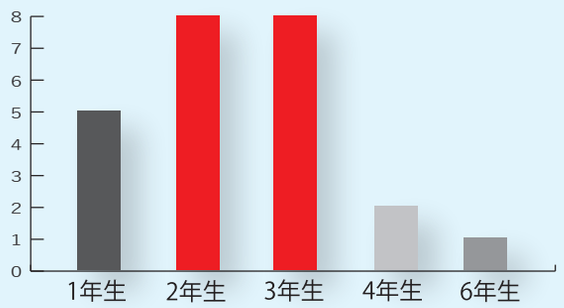




児童クラブで性教育が必要かという問いに対して、「どちらかといえばそうである」「大いにそうである」と答えた割合が32％。「実際にクラブで対応に困った場面に遭遇したことがあるので、研修などがあれば参加したい」「性教育は必要である」という意見もあった。「性教育の必要性は感じているものの、とても難しい問題であるし、学年の幅が広いのでどのようにとり組んでいけばいいのか悩んでいる」という回答もあった。また、必要ないという意見の中には、「低学年だから」という回答もあり、児童クラブの対象児童が6年生までとなっているにも関わらず、低学年しか受け入れていないという現状も浮き彫りになった。

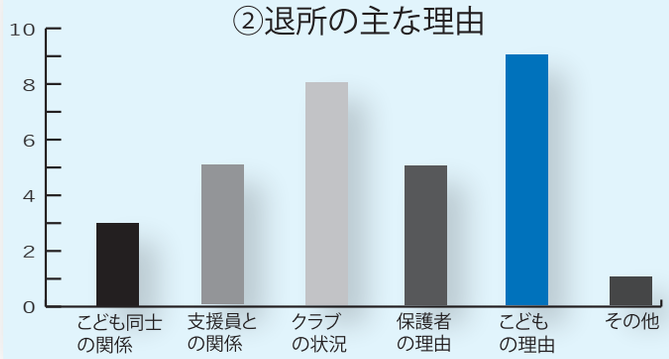
【保護者聞き取り調査】

①退所した学年



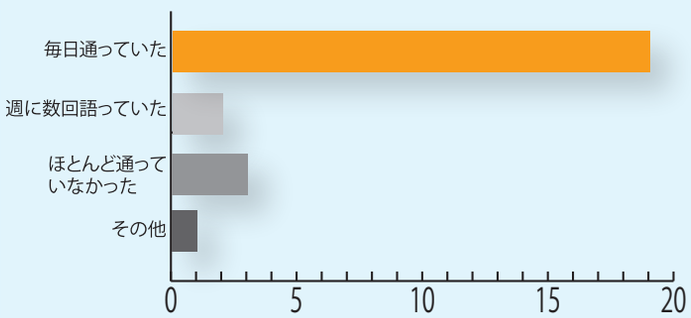
2年生、3年生での退所時期はさまざまであった。「2年生から待機となり入所できなくなった」「夏休み前」「夏休み後」「秋ごろ」「3月末まで」などがあった。

②退所の主な理由



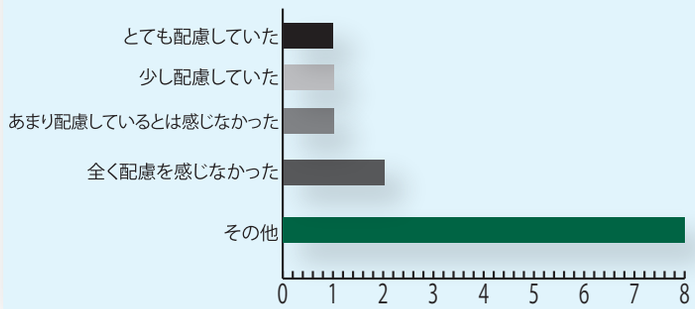
退所の主な理由のでは「こどもの理由」が10名と最も多く回答があった。「下校時間が遅くなった」「習い事にいく」「社会体育に入った」「留守番ができるようになった」などが挙げられた。つぎに「支援員との関係」が8名、「保護者の理由」が5名となった。（複数回答）

③退所前の利用頻度



退所前の利用頻度は「毎日通っていた」が最も多かった。退所後の保護者の仕事の継続状況は、「今まで通り仕事を続けた」が55%、「仕事を辞めた」が35%となった。仕事を継続をしている場合は、「長期休みにこどもを連れて出勤」「両親が勤務調整して対応」「リモートワークが増えた」などがあった。祖父母の協力を得てなんとか毎日を過ごしている様子もあった。

④ジェンダーについての配慮



「学童保育の中でジェンダーへの配慮があったか」では「その他」が最も多かった。「学童保育の中の様子がそもそもわからない」ということであった。「全く配慮を感じない」では、「特に男の子に対して支援員が怒鳴っている様子が多かった」や、「支援員によって男女に差をつけた対応をしていた」という答えがあった。「配慮している」と答えた理由として、「男女ではなく本人の意思を大事にしてもらっていると感じていた」や「ピンク色が好きな男の子が笑われた時に、支援員から適切な対応をしてもらえた」などがあった。保護者の多くは学童保育内の様子がよくわからないと感じているようである。

今回の調査で「学童保育は今後どうなってほしいか」と尋ねたところ多くの切実な意見が寄せられた
安心して6年生まで利用したいが現状は難しい。こどもが行きたくなくなる
こどもにも親にも安心な場所になってほしい
とにかくひどすぎる。刑務所化しないでほしい
必要な人、希望する人が利用できること
本当は19時まで利用したいが、今は早く迎えに行きたい。長時間いたらきつい。仕事をもっと増やしたいと思っているのだが・・・
学年によって利用料の違いがあってもいい
要望苦情や相談体制が整ってほしいと思う
児童クラブは本来自由なところだとこどもも知らない
いろいろと縛りが多すぎる
クラブに通っていないこどもと遊べる環境が欲しい
親が働くうえではどうしても必要な場所。行きたいくないというこどもの意見は二の次になって通わせていた
外でよく遊んでいた。支援員さんにはよくしてもらっていた
以前はこどもを従わせるという雰囲気が強かった。今はメンバーが変わりとてもよくなった。退所した後も声をかけてくださるのがありがたい

今回は7市2町の保護者からの聞き取りであった。今後も保護者の声を聞き取る調査の必要性を感じている。

【2022年度佐賀県学童保育学年別登録児童数】
（5月1日現在）

【新放課後子ども総合プラン　2018年】

現行プランにおける放課後児童クラブ、放課後子供教室の両事業の実績は、放課後児童クラブの約30万人分整備が順調に進むなど、大きく伸びているが、近年の女性就業率の上昇等により、更なる共働き家庭等の児童数の増加が見込まれており、「小1の壁」を打破するとともに待機児童を 解消するため放課後児童クラブの追加的な整備が不可欠な状況。

■放課後児童クラブについて、2021年度末までに約25万人分を整備し、待機児童解消を目指し、その 後も女性就業率の上昇を踏まえ2023年度末までに計約30万人分の受け皿を整備（約122万人⇒約152万人）

子どもの主体性を尊重し、子どもの健全な育成を図る放課後児童クラブの役割を徹底し、子どもの 自主性、社会性等のより一層の向上を図る。